

館蔵のオキナエビスガイ科標本

- 上左 オキナエビスガイ
- 上右 ベニオキナエビスガイ
- 左 テラマチオキナエビスガイ  
(採集地はいずれも奄美大島北西沖)

オキナエビスガイ科の貝は、巻貝であるが左右相称の性質が多く、軟体は神経系がはしご形で、心臓とえらが左右対をなし、原始的な特徴を多く残し、殻は巻いているが左右相称であった貝類の祖先の形態をしている。また、殻口には深い切れ込みがあり古生代から中生代に栄えた化石種とよく似ているので「生きた化石」と呼ばれている。

現生種は日本周辺と西インドに数種ずつと南アフリカの1種が知られていたが、近年世界各地で多くの種類が発見され研究も進んできている。日本近海では、鹿島灘から相模湾、伊豆諸島沖、土佐湾、九州から沖縄の水深50~200mの岩礁底に生息し、サンゴ網や深海底引漁で採集されるが、数が少なく非常に美しい貝で世界的に有名である。

## 目 次

○館蔵のオキナエビスガイ	.....	表紙
○資料紹介 松尾仁志氏寄贈の貝類標本（その1）	.....	2~3 P
○古代木器の保存処理(I)	.....	4~5 P
○〈講座ノート〉絵図にみる幕末期の佐賀の科学技術	.....	6~7 P
○行事のお知らせ・人事異動など	.....	8 P

## 資料紹介

### 松尾仁志氏寄贈の貝類標本（その1）

平成2年1月末に、佐賀市高木瀬東在住の松尾仁志氏より貝類のコレクションが「死蔵しているよりも、展示の場所が与えられ中高校生の勉学の一助や博物館の研究資料にでもなれば幸いだ」と、海産94科647種2582点、淡水産5科9種38点、陸産7科11種30点、未同定種50点、計106科667余種2800点の標本をご寄贈いただいた。

採集地は唐津湾、有明海、沖縄県各地、台湾を中心に志布志湾、日向灘、鹿児島湾、土佐湾、伊勢湾伊豆半島などの太平洋側各地、日本海側では佐賀県長崎県の各地や北海道奥尻島であり、採集品は暖流系の海産貝類が主体をなし、寒流系や淡水産・陸産は少ない。標本の中には、亜種や型を種と混同して同定したものやラベルがないものがあり同定の再検討が必要であるが、館蔵資料が文化館時代からの乾燥・浸透標本が多少あったのに比較して博物館の展示資料として活用できる数に達してきた。紙面を借りてお礼のうえからもリストを公表しておきたい。今回は紙数の関係で海産腹足綱（巻貝類）の科名と種数及び代表的な種名にとどめておきたい。

#### ◎ 海産腹足綱（巻貝類）55科476種2021点

1. オキナエビスガイ科（3種5点）表紙参照
2. ミミガイ科（8種19点）ミミガイ、マダカアワビ、クロアワビ、イボアナゴ、トコブシなど。
3. スカシガイ科（5種7点）スカシガイ、ヒラスカシガイ、オトメガサガイ、クズヤガイなど。
4. ツタノハガイ科（5種33点）ツタノハガイ、ヨメガカサガイ、ベッコウガサガイなど。
5. ユキノカサガイ科（10種63点）ユキノカサガイ、ウノアシガイ、キクコザラガイ、アオガイなど。
6. ニシキウズガイ科（28種160点）ニシキウズガイ、エビスガイ、ギンタカハマガイ、コシダカガンガラ、ヒラコマガイ、キサゴ、ノボリガイなど。
7. フルヤガイ科（1種2点）ヒメアワビ。
8. カタベガイ科（1種1点）カタベガイ。
9. サラサバイ科（1種5点）サラサバイ。
10. リュウテンサザエ科（12種41点）サザエ、ヤコウガイ、リュウテンサザエ、ハリサザエ、リンボウガイ、コシダカサザエ、チョウセンサザエなど。
11. アマオブネガイ科（15種90点）アマオブネガイ、アマガイ、コシダカアマガイ、カノコガイ、フ

ネアマガイ、キバアマガイ、コシダカアマガイなど。

12. アマガイモドキ科（1種5点）アマガイモドキ。

13. タマキビガイ科（8種162点）タマキビガイ、イボタマキビガイ、クロタマキビガイなど。

14. クルマガイ科（6種14点）クルマガイ、コグルマガイ、クロスジグルマガイ、マキミゾグルマガイ、ヒクナメグルマガイ、ヒロペソナワグルマ。

15. ムカデガイ科（1種4点）オオヘビガイ。

16. ウミニナ科（7種89点）ウミニナ、イボウミニナ、ヘナタリ、クロヘナタリ、カワアイなど。

17. オニノツノガイ科（12種36点）オニノツノガイ、カニモリガイ、エビガイ、コオロギガイなど。

18. イトカケガイ科（4種12点）セキモリガイ、オオイトカケガイ、タテヨコイトカケガイなど。

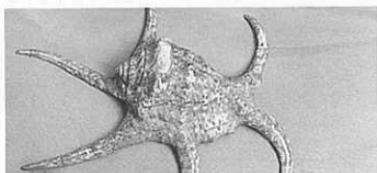
19. スズメガイ科（3種32点）スズメガイ、カワチドリガイ、キクスズメガイ。

20. ヒゲマキナワボラ科（1種2点）サワラビガイ。

21. カリバガサガイ科（4種21点）カリバガサガイ、アワブネガイ、ヒラフネガイ、シマメノウフネガイ。

22. クマサカガイ科（1種2点）クマサカガイ。

23. ソデガイ科（21種46点）スイショウガイ、スイジガイ、ラクダガイ、ソデガイ、クモガイ、サソリガイ、ベニソデガイ、マイソデガイ、マルソデガイ、ソデボラ、アツソデガイ、マガキガイなど。



スイジガイ（宮崎県日南海岸採集）

24. タマガイ科（19種79点）ツメタガイ、トラダマガイ、マサメタマガイ、エゾタマガイ、トミガイ、クロガギ、リスガイ、ゴマフタマガイ、マンジュウガイ、サキグロツメタガイ、ヒメツメタガイなど。

25. ウミウサギガイ科（2種2点）ウミウサギガイ、ヒガイ。

26. タカラガイ科（27種110点）ヤクシマダカラガイ、ホシダカラガイ、ハチジョウウダカラガイ、カモンダカラガイ、ヒロクチダカラガイ、キイロダカラガイ、カノコダカラガイ、タルダカラガイ、ホシキヌタガイ、ハラダカラガイ、メダカラガイなど。



ハラダカラガイ（沖縄県久米島採集）

27. トウカムリガイ科 (10種16点) トウカムリガイ、ウラシマガイ、ウネウラシマガイ、マンボウガイ、タイコガイ、ヌノメカズラガイなど。
28. フジツガイ科 (15種30点) ホラガイ、アヤボラ、オオゾウガイ、ショウジョウラ、ジュセイラ、シノマキガイ、ボウショウボラ、カコボラ、シオボラ、シロイボボラ、マツカワガイなど。
29. セコバイ科 (1種1点) ヒモカケセコバイ。
30. オキニシ科 (6種13点) オキニシ、オオナルトボラ、イワカワウネボラ、オハグロオキニシ、クチムラサキオキニシ、ミヤコボラ。
31. ヤツシロガイ科 (5種5点) ヤツシロガイ、ミヤシロガイ、ウズラミヤシロガイ、カスリミヤシロガイ、スジウズラガイ。
32. ピワガイ科 (1種4点) ピワガイ。
33. アクキガイ科 (44種145点) センジュガイ、アクキガイ、ヒメホネガイ、レイシガイ、アカニシ、ガゼキボラ、オニザザエ、テツレイシガイなど。
34. カブラガイ科 (3種6点) ミズスイガイ、ウネサンゴヤドリガイ、クチムラサキサンゴヤドリガイ。
35. タモトガイ科 (11種181点) タモトガイ、フトコロガイ、ケシマツムシガイ、カムロガイなど。
36. エゾバイ科 (23種88点) エゾバイ、エゾボラ、タイワンバイ、ゾウゲバイ、イソニナ、エゾイソニナ、ミクリガイ、シマアラレミクリガイ、ノシガイハイ、ホラダマシ、コホラダマシ、セコボラなど。
37. オリレイヨフバイ科 (19種107点) ヨフバイ、キンシバイ、アラレガイ、ムシロガイ、ヒメヨフバイ、ウネハナムシロガイ、ヒメシロガイ、オオハナムシロガイ、イボヨフバイ、ミスジョフバイなど。
38. イトマキボラ科 (11種21点) ナガニシ、コナガニシ、ヒメイトマキボラ、ニシキニナなど。
39. テングニシ科 (2種3点) テングニシ、オニニシ。
40. オニコブシガイ科 (3種11点) テンコロボラ、オニコブシガイ、コオニコブシガイ。
41. マクラガイ科 (8種20点) マクラガイ、ジュ

ドウマクラガイ、ホタルガイ、ムシボタルガイなど。

42. ショクコウラ科 (1種1点) ショクコウラ。

43. フデガイ科 (26種88点) ハマズトガイ、イモブデガイ、ミダレシマヤタテガイ、ニシキノキバフデガイ、オオシマヤタテガイ、ノミフデガイ、スナミノムシガイ、ナガミノムシガイ、イトカケツクシ。

44. ヒタチオビガイ科 (5種8点) ホンヒタチオビガイ、イトマキヒタチオビガイ、ミヒカリコオロギガイ、ベニクジャクホラガイ、フリソデメロン。



ミヒカリコオロギガイ（沖縄県久米島採集）

45. コロモガイ科 (4種24点) コロモガイ、オリイレボラ、ホソオリイレボラ、トカシオリイレボラ。

46. イモガイ科 (31種72点) ダイミョウイモガイ、アンボンクロザメガイ、ヒシイモガイ、キジビキイモガイ、ロウソクガイ、ハイイロミナシガイ、カバミナシガイ、ヤキイモガイ、ナガイモガイなど。

47. クダマキガイ科 (8種33点) クダボラ、チマキボラ、ヒメモモイロフタナシシャジクなど。

48. タケノコガイ科 (8種26点) マキザサガイ、タケノコガイ、ベニタケガイ、イワカワトクサガイ、ヒメフトキリガイ、リュウキュウタケガイなど。

49. トウガタガイ科 (4種6点) クチキレガイ、オオクチキレガイ、ミガキクチキレガイ、ホソマキギ。

50. キジビキガイ科 (1種1点) カヤノミガイ。

51. ナツメガイ科 (2種9点) ナツメガイ、コナツメガイ。

52. タマゴガイ科 (3種21点) タマゴガイ、カイコガイ、カイコガイダマシ。

53. オカミミガイ科 (3種17点) オカミミガイ、ハマシイノミガイ、マダラシイノミガイ。

54. ユキカラマツガイ科 (1種3点) ユキカラマツガイ。

55. コウダカラマツガイ科 (4種29点) コウダカラマツガイ、カラマツガイ、キクノハナガイ、コビトカラマツガイ。

和名は、標準原色図鑑全集3 貝 保育社による。

(資料係長 宮崎武夫)

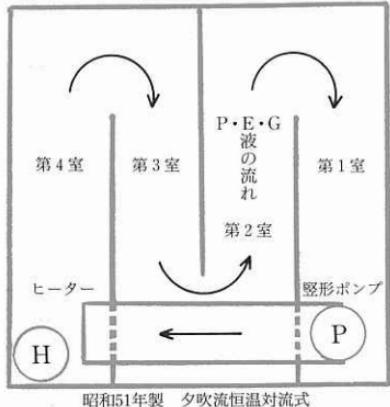
# 古代木器の保存処理(1)

## 木材恒久保存処理機の導入

佐賀県立博物館の開館準備で多忙を極めていた昭和46年9月、小城郡三日月町の鉱害復旧工事現場で「土生遺跡」が確認され、第1次発掘調査が実施されていた。遺跡は弥生時代中期の生活跡であり、木製品の出土が夥しかった。しかし、出土した木製品の資料的価値を無にしていくものが多く見られたものである。

当博物館においては「出土した木製品の価値を存続させ、展示可能にする為にはどうしたら良いか」と言うことに対して、その対応策に困窮していたことは事実である。同年10月、奈良国立文化財研究所沢田正昭技官に現地視察をお願いし、出土木製品の保存のための対応策を講じることになったのである。ともあれ、「取り上げられた木製品のビニール袋梱包、水槽処理方法はいずれにしても長時間における木材資料の保存処理ではない。いち早く奈良県元興寺文化財研究所等での保存処理を依頼るべきであろう」との結論であった。しかし、出土する木材資料の増加は全国的に上昇の機運にあり、これらの機関だけでは処理し得ないことは明白である。

当博物館では翌昭和47年3月の10日間にわたって「木器・鉄器の保存処理の理論と実際」について、奈良文化財研究所沢田技官の指導を受けることに<sup>ボリエオレンジ</sup>なったのである。この中で木器のP·E·G処理について「木材に内蔵されている水分をP.



〈上〉出土時点(1976) 〈下〉P·E·G処理後の現在  
E.Gと置換することによって樹脂加工することであつた。そこでボリ風呂にP·E·G1800番を溶解して木材の処理に当たるのである。(結果的にはP.E.Gと水との置換はなされなかつた。我々の処理方法に問題が残されたのである。)

昭和47年8月、県教委に文化課が創設され、文化財係に赴任、同年10月に第2次、昭和51年7月に第3次土生遺跡の発掘調査を担当。予期された如く木製品の出土をみたのである。

出土する木製資料は土器や石器などの資料とは異なり、頻度良く、資料を観察し環境の変化に対応していくなければならない。しかし、現実問題としては時間的に、なかなか実現困難なことである。従って木製品の資料的価値を無に帰すことが多いのである。このことから発掘された木製資料は、まず資料的価値を失わないようにP·E·Gによる保存処理を行なうことが必須の課題であろう。この過程を第1次処理と呼ぶ。この第1次処理まではその時点では資料の位置づけがなされないものであっても処理すべきであろう。将来、その資料の価値づけがなされるであろうから。この第1次処理が完了すれば、保存処理が全て終了したといつても過言ではあるまい。第2次処理以降は接合、復元、脱色がある。これは必要に応じて作業を進めていけばよい。

昭和51年秋、P·E·Gによる木器処理機「夕吹流恒温対流式木器処理機」なるものを試作した。P·E·Gタンクは、厚さ3cmの板材で縦横170cm、深さ90cmとした。内側にトタンを張り、ペイントを塗布した。このタンクに三枚の仕切り板を立てて4室となし、その仕切板の片方をそれぞれタンク壁面から30cm離すことによって4室が連結される。そこで第1室の奥の壁面に縦形ポンプ(スクリュウプロペラ式で、実は家庭用池の循環に使われるもの=ゼンスイクリーナー)を据え、第1室から第4室へ塩ビ管を直接配し、溶液を移送させる。第4室にサーモスタットのついた電気ヒーター(5km)を設置し、各室に水中温度計を配することによって処理機の完成

である。これが私の基本設計である。この装置にP・E・G 4000番で150日間処理した。この時の処理物件は鉄類など30点があり、昭和62年現在、処理後10ヶ年経過しているが、資料に変化はみられず、これの処理方法に間違いがなく行われたものと考えられる。

昭和63年度の予算に木器処理機の購入費が計上されたので、基本設計を母体により効率的な処理機の検討を加えた。

昭和51年度に試作した「夕吹恒温対流式木器処理機」の改良点は、次の如くであろう。処理槽の容量は1000ℓとする。処理の実施が冬期間ということもあって、タンクの床にP・E・Gが凝固したことである。従って床面に発熱器を設置する必要がある。これについては大分県立宇佐風土記ケ丘歴史民俗資料館で製作された（山田哲伸主任研究員）熱交換の方法は、床に配管したパイプにオイルを加熱して流している。P・E・Gの性質上液温100°C以上は危険である。P・E・Gの変質がないように加熱には湯を用い、床面にパイプを6、7本配管することが選択された。

次に液の強制的な対流作用に関して、P・E・Gをタンク外に出さないことを必須の条件とする基本設計を採用。堅型ポンプを用い、ポンプの反対側の床面から溶液を吸引するようとする。

ちなみに…ポンプからの吐出接口は2ヶ所設ける。つまり、処理溶液が1000ℓと500ℓの2つのタンクを兼ねたものにすると便利である。P・E・G溶液の温度は設定した温度を自動的にコントロールすること。ただし、液の濃度測定及び管理は人手で行う。熱交換の為の水は自動給水とし、設定した温度を自動的にコントロールするこ

と。蓋は軽量で水蒸気ができるだけ蒸発しないように工夫すること。これに装置異常を標示することとし、視覚と聴覚による標示を行うこと。

この装置の用材は可能な限り上質のステンレスを用いることを条件とした。

この基本設計図と要望をもって製作会社ダルトンと数回の交渉をもった後、8月下旬に納品された。これは、一応私の希望が満たされたものであったことを付記しておく。

#### 木材恒久保存処理機

形式 夕吹-2000 内寸法 W2300×D700×H800mm

材質 内装 SUS316 外装 SUS304

P・E・G循環ポンプ 堅型スピードコントロール付  
30W SUS304

温水循環ポンプ ラインポンプ

20L/min 80W SUS304

温水槽電気ヒーター 200V 3c 3kW

操作盤 スチール製 W450×D180×H800mm

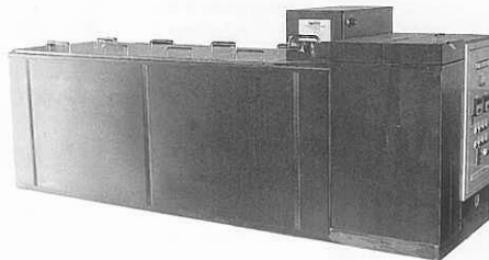
温度指示調節計他

網棚 SUS製 2段分

電源 AC200V 3c 3.5kW

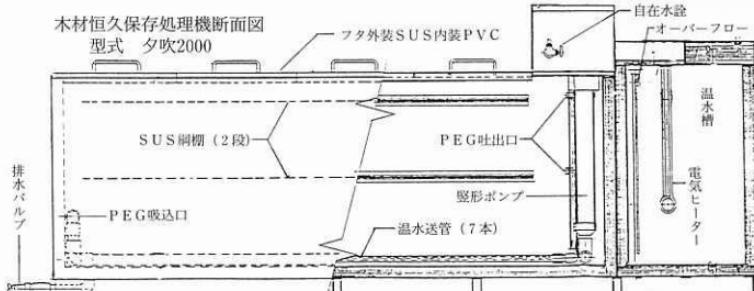
異常標示 「装置異常」の赤ランプの点灯とブザーが鳴る。

(専門員 木下 巧)



木材恒久保存処理機断面図

型式 夕吹2000



## 〈講座ノート〉

### 絵図にみる幕末期の佐賀の科学技術

幕末維新期の佐賀、特に佐賀十代藩主鍋島直正の偉績に関連して描かれた絵図が10数点ある。これらの絵図の大部分は、昭和初期、侯爵鍋島直映と海軍少将秀島成忠が協議し、秀島が原画をかき、検討のち日本画家陣内松齡に模写させたものである。このことは昭和13年5月5日発行「肥前史談五月号」(第11巻第4号、肥前史談会発行)がグラビア写真にとりあげた「長崎海軍伝習所之絵」(会誌には『帝国海軍発祥の図』とある)の「口絵説明」でこのことにふれている。秀島の原画の類はいずれも別所に保存されている。

陣内松齡によって描かれたこれら一連の絵図は、「佐賀藩銃砲沿革史」(秀島成忠著、昭和9年、肥前史談会刊)にも7点写真版で掲載されている。本稿では、これら一連の絵図の中から以下3点をとりあげ、幕末期の佐賀の医学、科学技術について考察を試みる。

#### 1. 種痘之図 隊内松齡画 紬本着色 軸装



佐賀県立病院好生館蔵

201.0×111.0

この絵は嘉永2年(1849)7月始め、佐賀城内本丸の奥殿で侍医大石良英が藩主鍋島直正(1814~1872)の世子源一郎(当時4歳、のちの直大)に種痘を行っている情景を描いている。後に立って見守っているのが直正公(36歳)、横が古川与一(松根37歳)、世子を介添しているのが中老園田、手前の籠坐が老女初島、隣りが古川与一の長子源一郎(9歳)、片肌ぬいでいるのが藩医樺林宗建の長子永叔(11歳)といわれる。先に樺林宗建は蘭船を通じて牛痘の痘苗を取りよせたが、腐敗して用をなさなかつたので嘉永2年(1849)改めて蘭医のモニッケを通じバタヴィアより痘瘡(かきぶた)をとりよせ、永叔に接種した。これが善感したことで直正の耳に入り、大石良英を長崎に派遣して、永叔を佐賀城内に呼び、本丸の奥殿で先ず嫡子淳一郎に接種した。この後、各藩士の

子供達に接種し、9月には江戸にもたらされ、伊東玄朴の女に植え、その種をとって直正長女貢姫(11歳)に植えたといわれる。江戸ではこれを称讃し、錦絵に描いてこれを奨励している。この絵に類するものが県立図書館にも所蔵されている。

当時、この痘瘡は日本最初のものとしてモニッケ種といわれ、江戸をはじめ、関西、中国、九州、山陰にも伝わった。江戸期、佐賀領内では元禄2年(1689)明和8年(1771)安永3年(1774)寛政6年(1794)享和元年(1801)弘化3年(1846)の6回にわたり痘瘡が大流行したという。樺林宗建による牛痘法は、寛政10年(1798)ジェンナーによる種痘法の発見から51年後のことである。かくて佐賀の医学は伊東玄朴の蘭医から医学寮、好生館(医学校)へと移り、明治になって好生館に病院が設立され、アメリカ人ヨングハンス、カナダ人スローン、ドイツ人デーニツツなどを御雇教師として迎えている。当時を偲ぶ資料として好生館に医学校で使用したテキスト類及び参考図書や医業免許名簿の「医業免札姓名録」などが蔵されている。

#### 2. 大銃製造方絵図 隊内松齡画 紬本着色



64.0×99.5 額装 鍋島報效会蔵

この絵は、嘉永3年、城内の築地(現、日新小学校内東南部)に築かれた反射炉操業の絵で、左端の逆し字に四基の反射炉、その右に鋳形其外細工小屋、つづいて鍛冶小屋、次の瓦屋根が大銃製造方役所、その後方が番宅、その後に蔵、続いて番子小屋物置つづいて、細工場といわれる。細工場の前の中央に煉瓦で築かれた鉄坪の炉がそびえ、そのまわり6ヶ所から、各々20人ずつがタタラを踏んで送風している。

幕府の勘定奉行、川路聖謨(1801~1868)の「長崎日記」の安政元年(1854)1月22日の項に、築地反射炉の見学印押として「返照炉にて、一度にズク鉄一万武千貫をふき立てたり、(昨夜九ツ時に仕かけ、今日四ツ半時にとけたり)返照炉というはタタラを用ひずして一度にズク鉄をふきて、鉄物ながら

鉄を銅の如く柔になるを以て、大銃をつくる也。ここにて水車を以て、大銃の穴をあけ、或は大銃を切り或は仕かけて、一方貫も有るものをわずか3人にてあげおろしを自由にする也」と感嘆している。

杉谷雍介が嘉永5年(1852)5月27日に起草した「反射炉築立鉄砲ノ概略」(大小銃砲製造録1)によると、①反射炉の築造と操業②水車及び鍛機等の製作③铸造大砲の試射、これらの作業を同時併行して行っていることがわかる。つまり反射炉の築造は嘉永3年7月から始め、嘉永5年4月で完了する。一方、錐台等の製作は嘉永3年10月から嘉永5年6月に及ぶ。また、反射炉の操業は嘉永3年12月12日の第1回の火入れから嘉永5年7月5日まで16回にわたって行なっている。この間、初めの4回は溶解不足で铸造失敗、5、6、7回は核錆(中子入り)、8回以降は実錆(無垢)の砲身ができるが、しかし嘉永4年4月18日から行った大砲の試射では、いずれも砲身が破裂している。したがって、铸造そのものは全部が失敗したことになる。杉谷の記録はここで終っている。その後、失敗の原因となる鉄の素材と調合の問題を克服して、やっと铸造に成功する。そして幕府注文の鉄製大砲50門を納め、さらに追加して150ポンド砲3門も献上する。佐賀で铸造した鉄製大砲はかくして、長崎港沿岸の警備は勿論のこと、アジアに進出してくる欧米諸国に対し、日本防衛のための第一線的役割を果す。

### 3. 佐賀藩精煉方絵図 隣陣松鶴画 紙本着色

「精煉」という用語は江戸時代、化学を意味するもので、佐賀藩では嘉永5年(1852)11月、国産方に「精煉方」を城北の多布施河畔(現、多布施3丁目)に設け、理化学の研究にあたった。主要メンバーは、主任の佐野常民、御雇の中村奇輔、石黒寛次、田中近江、儀右衛門父子などであった。



75.2×123.0 額装 鍋島報效会蔵

この絵は中央に蒸気車雑型の運転情況を描いている。中央、椅子にかけているのが藩主直正、説明しているのが田中近江、まわりの見物人は弘道館の生

徒たちであろう。手前にある船は蒸気船雑型(慶應元年、竣工した佐賀藩蒸気船「凌風丸」長さ60尺、幅11尺、10馬力の原型)後方の長屋の建物は、右端が鍛冶場、次に鋸物場、次の炉がガラス製造場、次に焼き物を取り出しているのが製窯所、隣の家屋は役所、生け垣のある家が御成所、その左端に田中近江の役宅、斜め前が中村奇輔の役宅、右端に紙すき場、手前の二階屋が蘭学所、一番手前が硫酸工場、道をはさんであるのがガラス小屋といわれる。右上には多布施川があり、それにかかる青木橋も見える。左下隅に「二千五百八十七年(昭和2年)、陣内松鶴」の落款がある。

精煉方の中村奇輔等が最初に蒸気車雑型が走るのを見たのは嘉永6年(1853)長崎寄港のロシア使節チャーチンの旗艦ハルラータル号の士官室であった。その後の研究で、安政2年(1855)8月1日、同雑型製造の許可申請を行なっている。この絵は、出来たての蒸気車雑型のおひろめという情景であろうか。また、精煉方でのガラス(佐賀ガラス)の製造はそのまま理化学の実験用具や医学薬品の容器に始まっている。そのため、工芸品よりむしろ実用的用途のものであった。

佐賀藩が幕末までに取り寄せた蘭学書は「洋書目録」(県立図書館蔵)によると732部(冊数では1000冊以上)が数えられる。精煉方での主なるテキストはドイツのワフルの「百工舎密」(百科全書)ウヰッティンの「科学全書」リュストの「百工提要」等が知られる。研究テキストで現存するのは、篤隆氏合著「百工舎密」(野中万太郎氏蔵)のほか、訳本として、「精煉方研究調査原本訳書」5包37冊(鍋島報效会蔵)などがある。精煉方での主なる研究はリュストの「百工提要」にそって、総金属類、塩灰類、硝子石灰、陶磁器、木材、製革、石鹼、紡績、製紙、醸酒、製糖、製薬写真などに及んでいるが、後では銅砲、火薬、製鋼、装線法(施絞砲)、造船、蒸気機関、電信機などであった。なかでも1860年(万延元年)オランダのフレメン著「英制小銃論」が発刊されると直ちに精煉方で入手し、文久3年(1863)から取りかかった後装施絞銅のアームストロング砲の铸造テキストにも使用されている。

このように精煉方では、わが国最高水準の理化学の研究がなされている。

なお、これに関連して第21回博物館土曜教室(平成2年7月7日)で「絵図にみる幕末維新期の佐賀」の講座を予定している。

(副館長 尾形善郎)

## 佐賀県立博物館開館20周年記念

### 佐賀の名宝一いとかたち一展

10月6日(土)～11月4日(日) 佐賀県立博物館

県立博物館が、開館以来20年にわたり行ってきた様々な調査や展示での成果を活かし、考古資料・絵画・彫刻・工芸・古文書等の国および県の指定文化財を中心に、佐賀県を代表する名宝約150点を展示。

（県重文）

清日輪文打出五枚胸甲足



### ◎常設展のご案内

展 覧 会 名	会 期	会 場
佐賀県の歴史と文化	～9月30日(日)	博物館・美術館

### ◎小さな展覧会のご案内

絵図にみる幕末維新期の佐賀	6月20日(木)～7月15日(日)	博物館
鍋島綏通・いまむかし	5月31日(木)～7月22日(日)	博物館
子供のための自然史・貝類その色と形の変化	7月20日(金)～9月30日(日)	博物館
佐賀の民俗(2)有明海の漁撈絵巻	7月26日(木)～9月16日(日)	博物館
佐賀ガラス／種臣・梧竹の書	7月26日(木)～9月16日(日)	博物館
彫刻考古賀忠雄の作品／陶磁器・染織など	7月25日(水)～9月24日(月・祭)	美術館
日本画形式の洋画家たち	7月25日(水)～9月24日(月・祭)	美術館
古賀忠雄の絵画	7月25日(水)～9月24日(月・祭)	美術館

### ◎博物館土曜教室のご案内

回 数	講 座 名	実 施 日	担 当 者
第20回	鍋島綏通ーいま・むかしー	6月16日(土)	宮原香苗
第21回	絵図にみる幕末維新期の佐賀	7月7日(土)	尾形善郎
第22回	昆虫標本の作り方	7月28日(土)	宮崎武夫
第23回	近代の風景	8月25日(土)	松本誠一

### 人 事 異 動

平成2年4月1日付

転入 学芸課長 横渡敏暉(伊万里市立大川中学校教諭から) 転出 学芸課長 小宮睦之(名護屋城跡調査研究室長へ)

嘱託 牟田寿吉(佐賀県立図書館から) 退職 嘱託 真子昭作

博物館・美術館報 第89号	発 行	佐賀市城内1丁目15番23号
発行年月日 平成2年6月1日	佐賀県立博物館	佐賀県立美術館
編 集 出 和 人	印 刷	御 大 同 印 刷